CIGS シンポジウム『東日本大震災と NGO － グローバルな視点を踏まえて』

2011 年 9 月 5 日開催

全体総括　〔 大橋正明氏（国際協力 NGO センター（JANIC）） 〕

私たちがこの本（「グローバル化・変革主体・NGO」新評論 2011 年）を刊行したのが 3・11 大震災のすぐ後だったので、急いで本の冒頭に「日本の NGO は、この震災で新しいページを開いた」ということを書き加えました。しかし、本日この会合を開催できたおかげで、もう１冊書かないといけないかもしれないと感じました。やり残していることがまだたくさんある、ということに気付かされたからです。そういう意味で、キヤノングローバル戦略研究所で行った私たちの研究会と、3・11 でさらに変化してきた NGO の活躍の流れについて、大変大きな学びの機会をつくっていただいたと思います。やはり私たち自身だけで見ていては不十分で、いろいろなことをもう一度振り返り、そして外の目から見た意見を言っていただいたことで、多くのことに気が付かされたと思っております。

私なりに、今日ここで NGO にとって非常に大きな学びになったことを、以下に申し上げる４つの点にまとめてみます。

NGO に不足していたこと

第一には、私たち NGO、NPO にとって、どういうことが問題だったのか、何がまだ足りていないのか、という点です。この第一点には、三つのポイントがあります。

まず最初のポイントです。3・11 の大震災に対し、NGO はとても早くかつ本格的に対応しました。しかし全体から見ると、ここは定松さんが指摘したとおり、日本の NGO 界の中で 3・11 で動いたのは全 NGO の内、わずか何分の一かだけです。動かなかった NGO も決して気持ちがないわけではないでしょうが、様々な事情で動けなかった、あるいは動かなかったのだと思います。NGO というのは多様化していることが意味であり、存在価値ですので、全部が一斉に出動するということにはなりません。それでもそういう気持ちを持っているところには、基本的な情報や支援をスピーディーに提供していくことが必要なのだろうと思います。

次に、いわゆる NGO の定款に国内活動が書かれていないので、国内の救援などをおこなえない、あるいはおこない難い、という問題が二番目のポイントです。より具体的に述べると、日本の国際協力 NGO が定款をつくるときに、NPO 法にある 17 種の特定非営利活動からいくつかを選んで記載するのですが、地方自治体の指導で極力少なくする傾向が強く、「６．災害救援活動」が省かれる場合があります。しかし今回のような大規模で深刻な事態においては、定款にこだわるのではなく、例外的な事態として良いのだという理解も共有していく必要があるのではないかと思います。

第一点の三番目のポイントは、本日のシンポジウムで何度か触れられたスフィアス・タンダードといったような、避難民や難民の支援で総ての支援者が配慮する国際的な行動基準があることが、不徹底なことです。そうした基準を現実的にどのように使うかというのはまた次のステップですが、そういう国際的な基準が存在することを NGO の関係者が最低限理解しておくことが必要です。つまり、NGO 内部での一層の準備というものが必要なのです。あるいはジャパン・プラットフォームと JANIC の間でも、もっと話し合いを進めておく必要があるかもしれません。

CBO の重要性とコーディネーション

第二は、本日の話で指摘されたように、大きな役割を果たしているのが NPO です。地域の社会福祉協議会や、住民組織であるいわゆる CBO（Community-Based Organization：地域に根差した機関）の方々がとてもきちんとした形で災害対応しています。外から見ると、こうした組織の有り様は非常に見えづらい、つまりバリアがあると思うのですが、実際にはそうした組織が大きな役割を果たしているのです。もちろん一つひとつの NPO の規模は比較的小さかったりしますが、全体としては大きな役割を果たされています。ですので、こうした組織と NGO の間のコーディネーションをどうしていくのかというのも、私たちの中に課せられている大きな課題であろうと思います。こういったような話し合いや振り返りなどを何度も開いていく必要があるだろうと思います。

福島での学びを伝える

第三は、福島での対応の問題というのは、今後ますます重要になってくるだろうと思うことです。これは私たちだけでなく、日本あるいは世界全体にとっても未経験の領域のことになってきます。私たちは、普段は南の国の開発や貧困などということに関わっているわけですが、そうした根底を揺るがすような事態でもあるわけです。これにどのように対応していくか。もちろん私たちだけでなく、政府も民間企業も皆さん対応されるわけですが、NGO や NPO もそれにきちんと寄り添っていくことが必要です。

そして、その次に特に私たちがやるべきことですが、福島での学びや経験を記録し、それらを全世界に伝えていくことです。これは NGO にとって、極めて重要な役割だろうと思います。もちろんそれは政府もなさるでしょう。JICA もなさるでしょう。しかし、やはり NGO という視点から、福島で何がどうなっていくのか、何を市民社会はしていくべきなのか、という視点で見て伝えることです。もちろん、市民社会の中でもいろいろな意見に分かれていくと思いますが、そうしたことを含めてきちんと正確に捉えて伝えていくという役割が今後残っていきます。これは広く言えば福島の経験だけではなく、今回の震災対応全体についても間違いなくそういうことは伝えていくべきことだろうと思っています。

国際協力 NGO の葛藤

最後に第四の点です。本日のシンポジウムで簡単に触れられましたが、基本的に国際協

力の NGO は、国際協力というものを１つの本業の現場として持っておりますので、そちらのエマージェンシーあるいはサイレントエマージェンシーな状態に関して、やはり力を注ぎ続けなければいけないという必然性と、今回の国内活動とのバランスというのも必ず問われていきます。国外の支援にはなかなかお金が集まりにくいという問題もある一方、いずれ私たちは被災地から引き上げなくてはいけない、という課題もあります。前者は、だからこそそのバランスをどのようにしてきちんと取り続けるかという問題です。後者は、基本的に何年かすると、あるいは早ければ今年度中に、日本の NGO はフェードアウトして、その現場から去ることになります。すると今までの例では、長期に渡り関わりを続ける日本の NPO や地元の CBO などの地元の団体からは、「おいしいところだけ食べて逃げて行くのね」というふうに言われたことがなくはありません。そういうことが極力ないようにするためにどのようにしていくのかということは、関わっている NGO にとっては非常に頭の痛い問題であろうし、もっと私たちがオープンに議論して経験をシェアしていくべきだと思います。

以上が、NGO の内部の課題として私が思う四点です。

NGO の認知の課題

これに対して、対外的に一番大きな問題は、本日も何度も触れられたように、災害対策の行政当局から、NGO がボランティアさんという形で全部一緒にくくられたことによって様々な問題が生じたことです。行政による市民活動の認知すらもなかったというときがありましたから、それなりに認知が進んだことはよかったと思います。しかし多くのボランティアさんは、少し状態が落ち着いて災害ボランティアセンターが開かれたときにそこに行く厚意の方々です。しかし NGO の多くは、もっと前に現場に飛び出して活動をしている状態です。ですから、中央でも地方でも、NGO が災害対策本部にアクセスを持ち、情報がシェアされることが重要なのです。例えば今回の場合は、震災直後に高速道路も使えなくなりました。NGO は緊急救援の役割を果たしているのですから、一部の医療機関や建設業界などには認められているような通行権を私たちにも出していただかないと、現場での活動ができません。これには結構手間取りました。この問題は、直接の担当者の方はわかっていても、国全体、社会全体、システム全体として、なかなか認知されませんでした。これはある意味で、日本の市民社会というものの力の弱さを反映しているわけで、情報へのアクセスを含めて、今後ぜひ改めるようにしていきたいと思います。

セクター間の交流の重要性

そしてもう１つは、通常時から私たち NGO 自身が災害対策というものについてほかのセクターと十分に交流し合うこと、もちろん ADRA やピースウィンズは以前からされていましたが、NGO 界全体としてもっとその部分をやっていくことが必要です。あるいは、きちんと位置づけてやるとこうなるのだということを、お互いに理解していく必要があるのだろうと思います。またそれらを調整する必要があるのだろうと思います。ADRA の場合は、まさ

に通常からこうしたことに関わって関係者をご存じであったからこそ、宮城県で素晴らしい働きができたと私は思っています。

ODA による国際協力

また、外務省の能化 NGO 大使のご発言にもありましたし、他の方も触れておりましたが、今回は日本のソフトパワーというものが働いたのだと思います。だからこそ、今回日本はこれほどにもたくさんの国際支援もいただきました。私も能化大使のご意見と同じですが、ODA で、特に人間の安全保障といいますか、人間の人権、存在といったことが脅かされることのないように国際協力を続けていかなければいけないのです。復興財源が必要なことはよくわかりますが、一方で ODA はもっと増額するというコミットメントもしているわけであります。そのことをやはり最大限に守らないと私たちはグローバルに生きていけないのだと思います。NGO は、やはりその点でも社会に対して声を上げていく必要があるのではないかと思いました。

以上に述べたことは、本日私が学んだ沢山のことのごくごく一部です。繰り返しますが、このような機会があったからこそ、こうした認識を持てたことに改めてお礼を申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

■